

岡本 貴久子 OKAMOTO Kikuko(国際日本文化研究センター共同研究員)

本研究は、近代日本社会において実施された「記念植樹」という行為を、その背景にある歴史事象と照合しながら、植樹に係る農事性、政治性、宗教性を総合的に分析し、それが行われた意図とその根底にある自然観を探究するものである。ネーションステーツ形成期には記念碑や記念像が多く設置される傾向が見られたが、記念事業として「木を植える」という活動もまた国家事業として促進された史実があり、加えて記念植樹を社会の潮流にのせる為にこれを逐一ニュースとした報道機関の存在から、近代化のプロセスにみる「記念植樹」の役割を問い直し、植樹と近代日本の関係性の構築を目指したのが抑々の研究テーマ選択の理由である。

本研究の論点は、第一に記念植樹に係る「実用性」と「儀式性」の考察、第二に本多静六の再評価にある。「実用性」とはインフラ整備に係る殖産性や風致性を意味し、「儀式性」とは記念碑性、思想性を意味する。実際、当時計画された記念事業を分析すると、実践的な緑化事業と儀礼的な植栽式という行為が、単独で、或いは複合して実施されるケース見られる故に、記念事業における植樹活動を研究するには儀式と実践の両面を問う姿勢が必要となる。一方、植樹を扱う人文学的研究においては就中、戦前期の桜の植樹に注目しそのイデオロギー性を指摘するものがある。だが戦後も国家事業として植樹活動が等しく尊重され連綿としている理由や、その根幹にある自然思想については語られてこなかった。これらの実学的及び人文学的研究のいずれにせよ共通するのが、近代造林学を築いた本多静六の姿が十分に論じられていない点である。というのも、同時代に営まれた各記念事業において、記念樹植栽や記念並木、記念林の造成を提唱し続けたのが本多を中心とする林学・林政指導者であり、その人物像と思想を中心に据えて検証しない限り、明確にならない検討課題は少なくないのである。そこで本研究では国民的行事に発展する記念植樹という文化的な行為について、その牽引役となった本多を再検討することを課題として、偏らない視点で知られざる本多静六像を解明すべく分析を試みた。

三部から成る本文は、第一部で記念植樹を「念じて植える」と定義した上で、記念植樹の三形態(記念樹植栽・記念並木・記念林)の諸相を概観し、次にその由来を紐解く目的で、古代の神話や文学、民間信仰から古来の植樹や植林における儀式性と実用性について考察する。第二部では本多の人物像に迫る。まず本多の思想形成を分析する為に教育過程を辿り、第一に家庭内教育として接した富士山信仰「不二道」を取り上げ、第二に東京山林学校並びに国家経済学としての林学を修めたドイツ留学時代に焦点を当て、本多の西洋思想の受容と展開について検討を加えた。本多の人物像を踏まえたところで、次に本多が構築した植樹の功德と方法論に注目する。本多の説く記念植樹とは、老樹名木を手本に子々孫々と繁栄する「生きたる記念碑」を植えることであり、一人一本の植栽が森をつくり、個人の徳が社会の徳になるという功利説が特徴だが、この思想が宗教者をはじめ同時代社会に普及していたことが認められた。その方法論とは自然の威力を敬う姿勢があつて、森づくりという実利的事業も成り立ち得るという理念に基づくものであり、この点から本多造林学とは近代合理主義、科学万能主義に偏るものではなく、前近代的な思想と形態が融和した所に構築された学問であると理解できる。そして第三部では「『記念植樹』の近代日本」と題し、明治から昭和戦後期に営まれた記念事業を対象として、その活動の理念と方法論にみる発展過程について検証した。

総じて、記念植樹という行為は各記念のテーマのもとで「儀式」と「実践」という形態を以て様々に変容しながら実施されてきたことが分かった。そしてそれは時として「負の記念樹」になることさえあつた。記念像や記念碑が政治的事情により破壊されることがある。記念樹もまた伐採された例があるように記念物というのは時に左右される一面があることも忘れてはならない。だが心を込めて「念じて植える」という行為が有する樹木の生命を尊ぶという根本的な態度に違いはない。ここで冒頭に戻って、戦前、戦後を通して継承される植樹活動を支える思想とは如何なるものかという問いだが、つまりは自然物の生命やその繁栄を尊ぶ自然観が根底にあるからこそ、記念植樹という行為に普遍的価値が認められ、イデオロギーを超えて、一つの国民的な行事として発展し、今日に継承されていると考えられるのである。

